

書評

イブラーヒーム・アル・クニー著

奴田原睦明訳

『ティブル』

財団法人 国際言語文化振興財団  
株式会社 サンマーク

八木久美子

訳者の紹介によると、自身、トウアレグ族の出身である作者のイブラーヒーム・アル・クニーは、サハラ砂漠のこの遊牧民の世界を描いた作品をすでに20冊、発表しているという。この『ティブル』という作品でも、トウアレグ族固有の伝承や慣習、規範に彩られた独特の世界が描き出され、ところどころの註に訳者の苦心がこいま見られる。

物語の軸は、主人公のウーハイドという青年と彼がこよなく愛する美しいまだら駱駝との強い絆である。とりわけ、疥癬に罹り、病んだ皮が剥け血だらけになり狂ったかのように暴走するこの駱駝からウーハイドが手を離さず、自らも傷だらけになることによって両者の血が混じり合い、「血によって結ばれた兄

弟になる」場面は強烈な印象を与える。

ウーハイドはアイワルという、「彼女の歌を聞いた者は皆感動し強く魅了されるような娘と恋に落ち、結婚する。このとき、ウーハイドは結婚の祝宴のために、まだら駱駝の疥癬を治してくれたら奉納すると神に誓願を立て、奉納のために肥えるのを待っていた駱駝を屠ってしまう。まだら駱駝は牝駱駝にうつされた疥癬によって命すら落としかけ、一方でウーハイドはアイワルという女に心を奪われたために神への誓願を忘れる。

一帯が飢饉に見舞われた時、飢えた妻子を前に成す術のないウーハイドは、アイワルに思いをよせるオアシスに住むある男の策略のり、まだら駱駝を担保として預けてしまう。男はウーハイドとまだら駱駝のつながりを見抜き、まだら駱駝を返す条件として、アイワルとの離縁を要求してくる。苦悩の末、妻子を手放すことよってやつと手に入れたかと思われたまだら駱駝とのやすらぎは、男が広めた、ウーハイドは砂金(ティブル)欲しさに妻子を売ったという噂によって瞬く間にかき乱される。ウーハイドは、トウアレグにとつて最高の価値である「名誉」を傷つけられたのである。彼は男を射殺するが、結局、まだら駱駝を囚にして男の縁者に捕らえられ、凄

惨な最期を迎える。

ウーハイドはまだら駱駝へ、「女は男に取って最大の畏」、「アッラーの呪いが女共の上に下りますように!」と女への警戒心を何度も吐露する。ウーハイドにとって、女とは男を魅了し、それゆえ束縛する危険な存在であった。この自由を何よりもよしとする生き方は、定住民に対する彼の眼差しにも表れる。彼にとつてオアシスに住む定住民とは、「極めつきの奴隷」であり、魂の自由を失った侮蔑すべき人間なのだ。

しかし、人間はすべての束縛から自由になどなれるのか。ウーハイドは「兄弟」であるまだら駱駝との絆を断ち切ることはできず、「名誉」という規範からも自由ではなかった。それはつまり、彼がトウアレグであることを選びとつたということなのであろう。

この作品は、トウアレグ族の世界という我々にはなじみのない世界に生きるある男という一つの特異性をどこまでも掘り下げていくことよって、逆に一人の人間が自らの生を自分のものとして生き抜くことの意味という普遍性を獲得している。